

第1回世界柔道形選手権大会

小俣幸嗣

1. はじめに

2008年のワールドカップに続いて、国際柔道連盟が主催する初の「形」世界選手権大会が、10月17日（土）、18日（日）の2日間、マルタで開催された。イタリアの南部地中海に浮かぶ島国マルタは、我々には馴染みが薄い国であるが、ヨーロッパのリゾートである。また、軍事戦略上重要な位置にあるため、歴史的に覇権争いの舞台となったところでもある。参加したのは昨年とおなじ23カ国であった。

講道館柔道には形と乱取があり、形は通常7種が行われているが、採用された形は五の形、古式の形を除いた投の形、固の形、極の形、柔の形、講道館護身術の5種目である。また18日は最初の「柔道ショウワールドカップ」という新しい演技会も行われた。

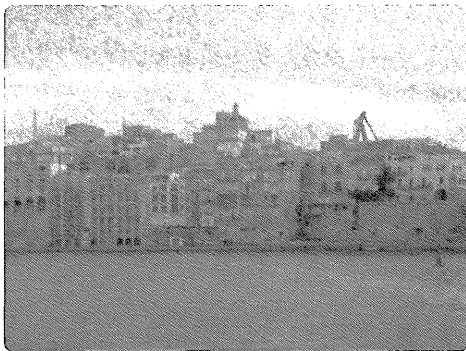


写真1 海からみた街

2. 大会

会場となった島の高台にある体育館コッtoneラ・スポーツ・ホールには、外側を赤

い畳で囲んだ10×10mの試合場が3つ設営されていた。

出場は各国2チームまで可能であるが、参加したのは投の形が19組、固の形が18組、柔の形が16組、極の形が15組、講道館護身術は14組だった。日本は各形1組のみが参加した。柔道ショウは7組という小さな規模で、競技というよりアトラクションに近く、いろいろな形態が見られ、採点するにも観点や基準がどうなるのか不明だった。日本は趣旨に不賛成の立場からこのショウに参加せず、審査員も出さなかった。

審査員は昨年ワールドカップでIJFから認定された32人のうち、26人（欧州20人、アジア2人、パナナム1人、豪州3人）が参加した。大会前日には審査員セミナーが1日かけて開催された。前回大会の映像による技評価の観点の確認、模擬採点とその評価の検討が個人に対して行われ、コミッションメンバーがアドバイスを行った。

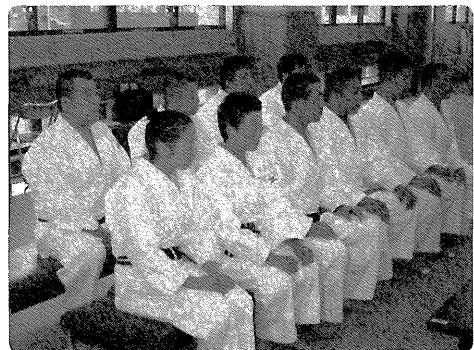


写真2 代表選手達

初日は投の形、固の形、柔の形が行われ、2日目は極の形、講道館護身術、柔道ショウが行われた。審査員5人とコミッションメンバー1人は、正面側に一列に並んで坐り、すべての形に対し一方向から審査にあたった。

試合は9時30分から各形の参加者を2グループに分け、2試合場を使って予選を行い、昼食休憩をとって2時からは予選各組上位3組の6組によって決勝を行った。

なお決勝の演技順について、昨年のワールドカップでは、予選の点数の低いものから始めたが、今回は演技順番を抽選で決めた。

2. 日本選手団

日本選手団は団長に松下三郎氏（講道館）、監督に尾形敬史氏（茨城大学）、コーチ兼ビデオに向井幹博氏（講道館）、ビデオに菅波盛雄氏（順天堂大学）があたった。また、審査員として、IJF審査員の佐藤正氏（講道館）、永井多恵子氏（講道館）が参加した。

選手選考、強化は、2009年6月に発足した全柔連の形特別委員会が担当した。昨年のワールドカップの成績を参考にし、まず固の形、柔の形、講道館護身術については優勝者を推薦として決定した。投の形は過去の実績をもとに4組を、極の形については2組を選考し、7月25日（土）講道館で選考会を行って決定した。その後、各組には9月20-22日に講道館で合宿をし、担当コーチのもとで1日5時間の練習を行った。さらに勤務との関係もあるため地方在住者に対しては、コーチが現地へ出向いて指導を行った。

代表選手は、投の形：近藤克幸氏（教員）、大河内哲志氏（柔道整復師）、固の形：松本祐司氏（柔道整復師）、中橋政彦氏（会社役員）、極の形：竹石憲治氏（警察官）、植松恒司氏（警察官）、柔の形：横山悦子氏（会社員）、大森千草氏（柔道整復師）、

講道館護身術：濱名智男氏（警察官）、山崎正義氏（警察官）であった。

外国人選手達の上位郡は講道館の夏期講習で見覚えのある者や指導した者もいて、演技レベルも推測できた。レベルに関しては、確実に昨年より向上している、という出場選手達の意見であったが、見ている私も同じ感想をもった。

3. 審査法

形は講道館において柔道創始時代から行われているものである。時代の経過とともに多少は変化してきた部分もあるようだが、基本的には変わっていないといわれている。動作は実技による伝承のほかテキストによっても伝えられている。

講道館夏期講習会では形の指導のあとに演技会が設けられ、指導員たちが一定の到達度合いにあると認めた者に免状を出している。しかし、それらは演技者を互いに競わせて序列をつけるものとは異なる。

試合場は国内では50畳の畳つまり9.1m四方であるが、外国では8m四方で試合を行っている。したがってその試合場で形を行えば、試合者が場外に出してしまうこともあるため、10m四方の試合場を使っている。厳密に言えば、位置など講道館が規定している距離と多少異なるのだが、大会では特に混乱もなく、見る側からは特に違和感もなかった。



写真3 日本選手団

技術評価は国内の大会では各技を10点満点とし、「優れている」10-9点、「やや優れている」8-7点、「普通」6-5点、「やや劣る」4-3点、「劣る」2-1点としている。技数のほか「全体の流れやリズム」「礼法」などの評価項目も入るので、各形によって満点も異なる。採点は5人の審査員の最高点と最低点をのぞいた3人の合計点が選手の得点となる。

ヨーロッパでは、講道館の出している形ビデオをモデルとして、ミスの程度によって減点していく採点方式を採用している。ミスの動作はルールに決められていて、大きなミスは5点で1個まで、中程度のミスは3点で1個まで、小さなミスは1点で2個まで減点できる。審査員は間違いの程度と数だけをチェックし、「流動性、リズム」「礼法」の項目には点数を入れる。この点数の基準は国内とほぼ同じで、5人の審査員の最高点と最低点が省かれ、残りの3人が合計されるのも同じである。

乱取試合では、審判員が自国の選手の審判は担当しないのが通例であるが、形の場合は審査員と演技者は同国であっても同じように審査に関わっている。

4. 試合

競技化される以前、形は大会に花を添える演技として行われていたこともあり、採点される対象ではなかった。そのためか失敗があっても一部専門家あたりに批判される程度で終わっていたようだ。しかし、競技となり、公式国際試合となった今は、悠長なことは言っていられない。いわゆる採点競技にある規定演技という範疇で扱われるようになったからである。演技においては十分に訓練された演技者であっても、本番では何が起こるか分からないものである。予選と決勝で演技の出来栄えが違うのは当たり前であるし、技の順序を間違えることも珍しいことではない。

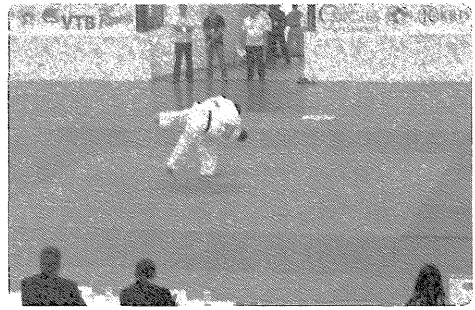


写真4 演技

事実今回も、小さなミスや一瞬の勘違いなどはいくつかあったようだ。ある選手は極度の興奮が異常な動きを生じさせたのだろうか、予選で肉離れを起こしてしまい、演技に支障が出るくらいの痛みを訴えるアクシデントがおきた。幸い決勝に臨む前には薬を使ったが、本番では凄まじく気迫のこもった演技で怪我を全く感じさせなかった。日本がこの大会で負けるわけにはいかないという使命感だったのだろうか、勝利への意欲以上のものが伝わってきて観ているこちらも感動した。

5. 現状と課題

前述したように全柔連では2009年6月に形特別委員会（松下三郎委員長）を発足させ、選手の強化を図るため各形に対して担当コーチを配置し指導にあたった。選手はすべて社会人の有職者であり、しかも合宿の形態をとっても選手個人によって取り組む内容は全く別であるため、その方法には工夫を余儀なくされた。遠方の在住者の場合などはコーチが選手のもとに出向くこともあった。

形の国際化は始まったばかりだが、世界の動きに呼応するようにアジアでも2010年から大会が開催される予定で、動きは一気に加速されそうである。東南アジアのオリンピックであるSEA (South East Asian) GAMESでは、2007年から投の形

と柔の形が採用されており、乱取試合ではメダルに縁のなかったラオスが、両方で金メダルを獲得して関係者を驚かせた。各国はそれぞれ選手を4～6週間も講道館に送り、指導員からマンツーマンの指導を受けたようだ。2009年も同様の強化が図られたが、投の形はヴェトナム、柔の形はタイが優勝した。

競技化によって形の演技がマニュアル通りになり、ミスを避けるあまり迫力に欠けてしまったり、理合いに則っていなかったり、逆に過剰な動作で芝居化したりするなど、審査員向けの作為的な演技が増えることは今から懸念されている。そんな中、日本人関係者には今まで守り継承してきた自分たちの形から乖離し、本質的な面が損なわれることへの不安が少なくない。

6. おわりに

筆者はIJFの形委員として運営にあたった。日本選手の活躍の中でも個人的には筑波のOBである中橋選手の固の形優勝が大きな喜びであった。中橋選手は嘉納治五郎杯国際大会でも優勝するなど一流の競技選手であったが、形においてもトップにたっ

たことで、形と乱取の両方を追求する柔道家として、今後新たな評価がなされるに違いない。

大会は、まだスタート地点に立ったばかりで、競技ルールの明確化、採点基準の統一、形種目増加への対応などIJFには整備すべき問題がたくさんある。今後は、日本の牽引力と指導力が今以上に求められることだろう。

○参加国と成績

国名	参加数	1位	2位	3位	4位	5位	6位
日本	5	5					
スペイン	5		3	1	1		
イタリア	10		2	3		1	
ルーマニア	2			1			1
ドイツ	2				1	1	
オランダ	4				1		
英国	5						1
フィンランド	4						1
イラン	3					1	
米国	2						
カナダ	7					1	
フランス	7						1
ベルギー	5				1	1	
南アフリカ	4						
スウェーデン	4						1
マルタ	5						
コロンビア	2						
ブラジル	2						
ボルトガル	2				1		
スロベニア	1						
韓国	1						
オーストラリア	1						
ルクセンブルグ	1						

○試合結果

1 投の形			
順位	国名	試合者(取、受)	点数
1	日本	近藤克幸、大河内哲志	455
2	スペイン	カマチョ・ラウル、カマチョ・ロベルト	444
3	ルーマニア	スルラ・ルリアン、フレイズ・アウレリアン	432
2 固の形			
1	日本	松本祐司、中橋政彦	478
2	スペイン	ゴイコエチャンディア・ジュアン、ピラー・ロベルト	436
3	イタリア	プロイエッティ・ステファノ、ディレロ・ステファノ	435
3 極の形			
1	日本	竹石憲治、植松恒司	596
2	スペイン	プラス・フェルナンド、チュンセウ・ウチャン	558
3	イタリア	デ・セルセ・ジアコモ、バドバン・ピエルルカ	543
4 柔の形			
1	日本	横山悦子、大森千草	470
2	イタリア1	ボルビ・ウバルド、カルデリーニ・マウリツィオ	461
3	イタリア2	ソツィ・イラリア、フリットリ・マルタ	442
5 講道館護身術			
1	日本	濱名智男、山崎正義	621
2	イタリア	マイネンチ・ダニエレ、ファッショリ・アンドレア	584
3	スペイン	イエサス・ベラーノ、マキシモ・ゴンザレス	576